

御子左家の血筋（二）

高田 友

曩なほに定家の曾祖父忠家の戯れに作りたる歌を御紹介仕れり。周防内侍に手枕を差し出したるが、「春の夜の夢ばかりなる手枕に甲斐なく立たむ名こそ惜しけれ」とあしらはれたる逸話なりき。今日はその息俊忠の戯れの歌なり。忠家の歌と同じく、小倉百人一首には相方の歌のみ残りとも雖も、これまた名歌にして、さこそは定家の祖父なれと感ずる所なしとせず。

（一）

さは金葉集に入集はいしゅうしたる應答歌にて、俊忠の相方は祐子内親王家紀伊なりき。

祐子内親王は後朱雀天皇皇女にして、外戚を尋ねれば、祖父は枕草子に名高き皇后定子所生の敦康親王なり。而して、作者は皇女に仕へたる女房にて、その名を紀伊とは申しけり。

閑話休題

定子は皇后、彰子は中宮にて俱に一條天皇に仕へ奉る。道長は我が姪なる定子を虐げたりと傳へらるるも、さは女むすめ彰子所生の敦成親王の登極を願ふ餘りの非道にて、私わたくしの儀に於ては無道を行ふはなかりき。彰子は優渥なる爲人ひととなりにて、定子を慕ひ、一條崩御ありて傍系三條天皇踐祚のをりには、已に亡き定子所生の敦康親王長子なるがゆゑに之を立太子せしむべしとて道長に懇願して笑殺せられしとの由。然れども、その後、道長は敦康の養育に心を碎き、敦康は才覺・容姿・心映、いづれも世に優れたる爲人に成長したりと言ふ。祐子内親王は三條天皇皇女なるが、敦康親王女姫子の腹なりき。

孝和四年（一一〇二）閏五月、「堀河院艶書合」催されたるをり、俊忠先に歌ひかけ、紀伊之に應答したるあり。

左方、俊忠の歌は斯の如し。

人知れぬ思ひ荒磯の浦風に波の夜こそ言はまほしけれ。

「思ひあり」と「ありそ」、「波の寄る」と「夜」を掛詞と爲す。「荒磯」は「あらゐそ」の母音連續するを避けて「ありそ」とは訓ず。

「我が片戀、渚を吹く風に翻弄せらるるが、夜には一人君を偲びて涙すとは知り給ふや」の意なり。

これに對して、右方、紀伊の返して詠める

音に聞く高師の濱のあだなみは掛けじや袖の濡れもこそすれ

「高師」は和泉國高石郡の濱邊の名なれど歌枕としてぞ知らるる。格別荒るる磯にはあらねど、その名により波高きを聯想せしめ、該歌にては、男の戀の浮名高きになずらへてあり。但、思ひを掛けたる人を「浮名高し」と難ずるは戀の常道なれば、俊忠さこそこの道にまめなりしかと傳へらるるの儀はつひに聞くことなし。

あだなみの「あだ」(「あだなり」「あだに」)は「無意味」「無駄」「空し」「甲斐なし」を言ひ、例を舉ぐれば「あだに散る露の枕」(新古今俊成女)とは、「涙にて枕を濡らすまでに泣きたれど、空しく實を結ばざる片戀にぞ終りぬる」と言へるなり。「いたづら」とほぼ同義と言ふべし。

然則、「音に聞く」の一首は、「名高きプレーボーイなる君、誠なき甘言を弄して妾を誘ひ給ふ。これを持みて身を任せたらむには、涙に袖濡れて空しき戀に終るの外なし。豈あだなる波を袖に掛くべしや」と斥けたるなり。いふに及ばざるの儀なれど、歌合の歌にて、たはむれに作りたるなれば、王朝歌人の遊び心と解すべし。

因みにこの時、俊忠二十九歳の若き御空なれど、紀伊はすでに七十歳。さはゲームの如き歌合。何爲異と爲すべけむ。

閑話休題、巖流島の決闘の砌、武藏は齡二十九。小次郎は前髪凛々しき美少年と思ひきや、五十乃至七十の老翁とぞ傳へらるる。俊忠と紀伊になぞらふべき懸隔あり。然而、武藏は容赦なく其の頭蓋を叩き割る。さを思へば、齡壯室(thirty)に至らずして、古希(seventy)の女性にたはむれの戀を仕掛けたるのはほゑましきに感ずる所なしとせず。

(二)

臺灣にて如今歌はるる歌謠曲にかつての本朝を思はするノスタルジアの曲あり。「湯島の白梅」の「忘れられよか筒井筒」に似て、幼馴染の成長りて、相思相愛になるをぞ思はする。

まづは原文を示し、我が訓讀を附せむ。

時光一逝永不同

往事只能回味

時一たび逝けば永く回らず

往事は只能く回味むのみ

憶童年時竹馬青梅

兩小無猜日夜相隨

憶ひいづる童年き日の竹馬青梅

兩小無猜なく相隨にあり

春風又吹紅了花蕊

你已經也添了新歲

春風又花の蕊を吹き紅らし

你已經にして新たなる歳を添ふ

你這樣變心像時光難倒回

我只有在夢裡相依偎

你這樣は心變りたる、時歸り來るの難きに像る

我只夢の裡に在りて相依偎ふのみ

(三)

偕、右歌の題名は「往事只能回味」と申すなれど、この曲に合はせて、俊忠と紀伊の歌を新體詩風に解題せり。庶幾くはインタネットに（往事只能回味・尤雅・伴奏 KARAOKE）と打ち込みて、空桶を聞きつつ、我が歌詞にて歌ひ給へ。

人知れぬ思ひ荒磯の浦風に波のよるこそ言はまほしけれ

君を思ひて

かくこそ忍ぶれ

沖より吹き來たる

秋の風荒み

渚に波ぞ寄る

夜には身を知れど

火影に君を欲りて

え堪へずして泣くべしや

Hardly able to forget you,
I am tolerating this unanswered love.
Oh, from off coast
A winter wind comes blowing.
It drifts waves toward the beach.
Hearing the sound of the waves,
I realize I am in one-sided love with you.
I am so anxious to see your phantom
That I do nothing but weep, in a flicker of light.

音に聞く高師の濱の徒波は掛けじや袖の濡れもこそすれ

いづみたかishi
和泉高石

高師の濱邊
誰かは知らぬらむ
浮名いと高しと
君そのかりそめの
言の葉持めば
時経で袂朽ちて
言痛き世になづみなむ

In the County of Takaishi, Province of Idzumi,
Is located the famous beautiful beach of Takashi,
Where the waves are unrestrainedly wild and high.
Everybody knows you are as unrestrainedly crazy about many women.
My friends tell me not to depend on your sincerity, if any.
Otherwise, I would be destined to wet my sleeves with my tears,
Until at last I have to endure people's derisive smirks.

(令和四年十二月十五日受附)